人間革命

人間革命

第八巻

池田大作

聖教新聞社

人間革命

第八巻

昭和48年8月1日　発行
昭和51年12月20日　第29刷

定価はケースに
表示してあります

著者　池田大作
発行者　美坂房洋

発行所　郵便番号 160
東京都新宿区信濃町18
電話　03（353）6111
聖教新聞社

落丁・乱丁本はお
取替えいたします

印刷　明和印刷株式会社
製本　株式会社　星共社

© D. Ikeda 1973　Printed in Japan

目

次

多　明　学　推　真　253
事　暗　徒　進　実　186　123　60　3

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人間革命

第八巻

装画　川端龍子

挿画　三川芳悌吉

真実

昭和二十九年――戸田城聖は、人知れず新たな構想を抱いていた。

彼は、二十八年の年間折伏が五万一千九百九十六世帯の成果を示し、実に前年度世帯数の二・五倍という満足すべき躍進的比率を示したことに注目していた。

前年の十一月二十二日、第九回総会の折り、小西筆頭理事は二十九年度の折伏目標を十三万世帯と発表している。戸田はこの発表を、会員の熱意を汲んで一応は許可したものの、暴走の危険を恐れていた。はたして、十二月二十一日の本部幹部会で、それぞれの支部長が立って、各支部の年間目標を順次に発表したが、それを総合計すると、やはり十八万五千という数字になった。

折伏目標の急増を、彼は喜ばないわけではなかったが――現時点における学会の指導力の限界というものを、彼はひとり苦慮しなければならなかった。

彼は、この時の幹部会での話で「仏法は勝負である」と説いたが、最後に、こう言って話を結

んだ。

「今日、支部長がほらを吹いたが、諸君もそれを真に受けてほらを吹くだろう。年間十八万というけれども、そんなにやらなくて結構です。八万で沢山だ。来年中に十五万世帯達成できれば、広宣流布はできることを、私は知っています。いくらやっても、教学や人材の育成がともなわなかったら、なんにもできないのです。それでは創価学会は潰れてしまうだろう。数が増えるだけでは虱の集団と同じになってしまう。来年二十五万世帯になったとしたら、とても手に負えない。会長の願いは、十八万やらなくてもよいから、八万だけはやって貰いたいということです」

戸田の胸に秘めた危機感は、この時の軽い発言となったが、豊島公会堂を埋めた意気軒昂の幹部たちは、会長は妙なことをいうと思っただけにちがいない。

彼らはここ一年間を振り返り、やればこの通り必ずできるという実践の確信から、二十九年度の目標も簡単に達成できるという、上げ潮の熱意にいたずらに酔っていたのである。寒い十二月の公会堂の空間は、恐るべき熱気にたぎっていた。

衝天の意気をそこに認めたものの、戸田はあくまで沈着な会長でなければならなかった。掌中にした七万世帯の会員たちの一人ひとりが彼には大切であった。彼らに無理な信心をさせてはならない。彼がもし、これ以上調子に乗って号令をかけたとしたら、暴走に陥ることは明らかで

ある。暴走する彼らは生活を破壊し、信心をも破るにいたるだろう。

彼は、一種の危惧をもって、二十九年の正月を迎えた。

折伏戦線が見事に軌道に乗った今、彼にとってなすべきことは、この軌道を確乎たるものにすることであった。戸田は、昭和二十九年の指揮は慎重にとらねばならぬ、と深く心に期したのである。

戸田城聖の周到きわまる指導と指揮は、二十八年に爆発し、学会の驀進が開始されたのだが――全学会員がかくも喜んで折伏実践を敢行するにいたったのは、彼らのその実践によって、漲るばかりの大小の功徳が全員に実証されはじめたからであった。それらの実証によって、彼らの信奉する仏法が、人生の最高の指針であることを、いやでも悟らざるをえなかった。戸田の指導をそのまま実践したとき、彼らは身をもって実証をつかんだ。実証はまさに事実であった。いずれの会員の各家庭にも現われた大小の功徳という実証が、彼らの半信半疑の雲を払ったのである。

「教」と「行」と「証」とが、寸分の狂いもなく一貫している事実に気づいた時、彼らは、これこそ現代の、生きている唯一の仏法であることを体得した。彼らの体得したところのものは、動かすことのできない事実の重さとなって、座談会で語られ、居並ぶ人びとを驚かした。こうした、幾つもの体験が事実として、どの座談会でも発表されるにつれて、それらを貫く真実の世界

が彼らの眼前に開かれたのである。それは彼らにとって、これまで見知らぬ世界であった。この世界の門にはいった彼らには、実践はすべて歓喜と変わっていった。歓喜は共鳴の連鎖を呼ぶ。彼らが等しく受持した一幅の本尊は、歓喜の源泉だったからである。

かつての灰色の人生には、思いもかけなかった、輝く黎明の空を、彼らは遙かに望むようになった。幾つもの事実が、ことごとく真実であるということへの驚きは、やがて、仏法が彼らの人生に普遍妥当性をもつ真理であるとの確信に変わっていった。彼ら一人ひとりのつかんだ実証こそ、現代における日蓮大聖人の仏法の偉大さを物語るものであった。彼らは、体験したところのものを、真実の強さで人びとに語った。未聞の歓喜をもって語った。やがて真剣の姿となっていった。彼らの熱意にあふれた饒舌が、日本の各地にひろがり、それがそのまま折伏の実践となったのである。

当時の学会員の大部分は、信心年数はきわめて短い。昭和二十七年頃の会員数は二万世帯で、すでに述べたように二十八年の入信者が五万世帯であったのだが、激しい実践活動は初信の功徳ともいうべき現証を人びとに等しく与えている。それは、人びとの容貌と宿命がすべて異なるように、千差万別の現証であったが、入信前と入信後との一線を画すものであったことには変わりはない。さまざまな現証の堆積は、個別的な事実を普遍性をもつ事実に変えた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

その頃の入信まもない人びとに起きた現証をいまたどってみると、彼らがつかんだ妙法に対する確信が、どのようなものであったかを鮮明に知ることができる。

杉並支部に所属する、富田成一という五十年輩の一学会員がいた。夫人は、明治の元勲の孫であった。彼は、東京の近郊に住み、応用化学を専攻した科学者であった。イギリスのマンチェスター大学にも留学したほどの篤学者である。帰朝すると、地方大学の教授から商工省の技術者まで勤めた知識人であったが、生来の内臓疾患による病弱には勝てなかった。

さらに富田は、不運にも戦争直後の混乱期に、膵臓壊疽という奇病にとりつかれて手術しなければならなくなった。

知人は、彼の不幸を見るに忍びなくなって折伏したが、長年の科学の信奉者が、素直に入信できるはずもない。手術はひとまず成功したが、終戦後のことである。彼は妻と三人の男の子を抱えていた。病弱の身体をおし、身についた語学を役立てて、駐留英軍の調達庁の顧問となって職を得た。ところが暫くすると、成功したはずの手術の後遺症として、腸がひどく癒着していることが判ったのである。

彼の日常は、腸閉塞の危険にさらされた。薄氷を踏むような日々が続いた。——ある時、医者

はまたも手術を示唆したが、前の大手術の苦痛を繰り返すことは、思っても辛いことである。この時、再び折伏された。彼は逡巡しながらも、苦痛からのがれたい一心で、ともかく実験証明してみることだと考えた。

この世で信ずるに足るものがあるとしたら、それは実験証明されたものだけではないか。科学の示すものが、真理として人びとに納得されるのは、実験証明にまつからである。

彼は入信して、半年間だけ実験をしてみようと思いたった。

「いくらか話を聞いただけで、信じろと言われても、今の私は信じられません。しかし病気は癒りたい。虫のいい話かもしれませんが、半年だけ実験のつもりでやってみてはいけませんか。そして、もしお話の通りであったら、私はいやでも信じますよ。科学者として実験証明してみたいのです」

「わかりました。現証をご自分でつかみたいわけですね。いいでしょう。ただし、定められた『行』だけは実行してください。これが唯一の条件です」

折伏するものと、折伏されるものとの間に、果てしない議論の末、一つの妥協点がここに成立した。

「もちろん、その条件は守ります。実験のないところに現象は出ませんもの。しかし、半年の実

験で証明されなかった場合は、私は必ずやめさせてもらうことも承知してください」

「結構ですとも。信仰はあくまでも自由です」

富田成一は入信した。

彼は科学者が実験を繰り返すように、勤行はもちろん、折伏実践も教えられるままに行なった。座談会にも、地区講義にもせっせと通った。不思議な実験である。そして半年たたないうちに、日ごとに健康は回復し、医者は手術を口にしなくなった。

実験は見事に成功したのである。科学者は信ぜざるをえなくなった。この世に、このような宗教——日蓮大聖人の仏法が存在することは、彼にとって、一つの驚異であったにちがいない。そして、驚異の眼で彼の過去の半生を振り返った時、さまざまな起伏をもった彼のこれまでの人生、宿命の貌が鮮明に映った。

彼は、わが生涯を厳粛に考え、妙法を最高の人生の指針と考えるにいたったのである。彼の「行」は進んだ。彼みずから得た動かすことのできない実験証明を、人びとに分かち与えることに生き甲斐を感じていった。身銭をきって、地方指導に赴く多くの幹部たちの姿を見て、彼もまた、それに参加することを念願とするようになったが、勤務先は出欠の厳しいイギリス駐留軍である。彼の願いは、叶えられそうにも思われなかった。

ところが突然、富田は解雇通知を受けたのである。その頃の、駐留軍の縮小にともなう人員整理の余波であり、比較的新しい雇員から馘首されていた。彼は、突然の解雇に不満をもったが、相手が悪かった。外国の駐留軍である。彼は、軍の命令に服するより仕方がなかった。

暮れを前にして、新しい就職先を捜さなければならないことを、彼は重荷に感じたが、かつて職を替えた時のような、絶望的な動揺は不思議にも感じなかった。むしろ、ほのぼのとした喜びさえ心の底にあるのが不思議でならなかった。若干の退職手当てさえあるではないか。彼は、念願の地方指導に初めて志願し、欣然として勇躍、一行に加わって九州福岡に向かったのである。

彼を加えて九名の一行は、博多の旅館に陣取った。そして、早朝から深夜まで、指導と折伏に専念する日が始まった。仕事のことも、家族のことも念頭になく、まるまる一日——信心の行動一筋で終わる日は、これまでの彼の生涯にはまったくなかったことである。なんという爽快な楽しさだろうと、彼は思った。しかも人びとの不幸を、着実に救いきっていく仕事である。彼は青年のように張り切って、敏捷に走りまわった。

三日後の午後——旅館で二人の婦人を相手に、妙法のなんであるかを説明していると、清原かつが姿を現わした。一行の責任者である。

「富田さん、ちょっと」

彼は立った。――蓮池というところで、今、一人の青年部員が折伏しているが、てこずっているらしい。誰か至急に応援にきて欲しいという電話がかかってきた――というのである。

「富田さん、すぐ行ってあげてください。あの二人の婦人は、私が引き受けましょう」

ほかならぬ清原支部長の指示である。彼は、実直な一兵卒のように、行き先をメモすると旅館を飛び出した。

彼は表通りで電車に乗って蓮池に向かった。初冬の麗かな九州の空は澄んでいる。五分もしただろうか、電車はゆるい坂を非常な速さで降りはじめた。と、この時、物凄い轟然たる音響がしたと思うと、乗客は一斉に転倒し、彼も床にしたたか叩きつけられた。濛々たる砂煙、車内は一瞬なにも見えない。埃がやや静まってから見透かすと、窓ガラスが一面に四散してキラキラ光っていた。

一瞬の事件である。倒れて呻いている人、頭や手から血が噴き出している人。彼は我に返って、自分の手足をおずおずと触ってみた。どこにも異常はない。かすり傷ひとつしていない自分を発見すると、彼はすたすたと歩いてひとり車外に出た。電車は前の電車に追突したのである。前部が滅茶苦茶に損傷していたのが、事故の大きさを物語っていた。

彼は呆然と立ちすくんだ。――すると、眼前の電車へ、また後続の電車が追突し、またもあたりは砂埃につつまれた。二重衝突である。電車から無事飛び出していたのは、彼ひとりである。追突し、また追突された彼の電車の乗客は、重なる怪我をしてしまった。やがて、大勢の人びとが救援に駆けつけ、多くの警官も駆けつけた。

富田は先を急いでいた。人心地ついた彼は、仏天の加護に感謝せずにはいられなかった。彼の感謝の念は、咄嗟に蓮池の任務を思い出させた。彼は手を上げてタクシーを止めると、さっさと乗り込んだ。

後で判明したことであったが、数十名の重軽傷者が出たことはいうまでもない。付近の八幡神社の銀杏や紅葉の落葉が、電車の軌道一面に散り、レールを埋め、車輪がスリップしてブレーキの制禦が失われたことが原因であるとわかった。

富田成一は、思いもかけない椿事に遭遇して、御本尊を信ずるものの絶対の加護を確信し、蓮池でも、またその夜の座談会でも、生々しい彼にとっての実験証明を語って尽きなかった。

その座談会の最中、一通の電報が彼を追いかけてきた。

彼は不安を抑えて、電報を開くと「フクシヨクツウチアリ、スグカエレ」――留守宅からの電報は、夢のような復職の通知であった。彼は飛び上がって喜んだ。一座の人びとに、彼は失業し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com